

看護指導者養成コースの問題点と実施に向けた小集団評価

The challenges and the results of the small-group evaluation in a nursing learning training

北村 隆始*1*2・西嶋 克基*1・星野 早苗*1・根本 淳子*2・喜多 敏博*2・鈴木 克明*2

Takashi KITAMURA*1*2・Katsuki NISHIJIMA*1・Sanae HOSHINO*1

Junko NEMOTO*2・Toshihiro KITA*2・Katsuaki SUZUKI*2

*1:テルモ株式会社・*2:熊本大学大学院教授システム学専攻

*1:Terumo Corporation・*2:Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University

〈あらまし〉 個別のスキル研修や座学研修が多い看護教育において受講者が実践的に学習でき、実際に研修カリキュラムを提供できるようになることを目的として2008年度より静脈注射における指導者のコースを開催した。昨年度はさらに医療現場との融合を図るよう統合的カリキュラムであるストーリー中心型カリキュラム（以下 SCC）を採用した。本年度の報告では、SCC での実地評価を終え、カリキュラムの改善を行い、その提供を前に再度形成的評価（小集団評価）を行った。さらに2009年度と2010年度に実施した小集団評価の比較結果と改善事項を明らかにした。最後に、総括評価実施に向けた内容についてまとめを加えた。

〈キーワード〉 ストーリー中心型カリキュラム・SNS・形成的評価・協調学習・看護教育

1. はじめに

2008年度より開始したインジェクション（静脈注射）トレーナー養成コースは、知識・技術・態度の総合的な研修として提供を開始した。コース評価は受講者アンケート（5件法）において、コースに対する満足度を問うたところ、大変満足が41%、満足が59%で好評であった。一方で、受講者より、多彩なセッション間のつながりがわかりづらい、受講者間のコミュニケーションをもっと行いたかったなどの意見もあった。コースは実質的に7日間でありながら、期間が4ヶ月にも渡ることに起因するものであった。コースデザイン上では、期間を置くことで、学習した内容を職場で実践して繰り返すことを考慮したワーク・ブレース・ラーニングの手法をデザインしたが、十分に意図が伝わらなかった。これらの点を改善するため、各セッションは担当講師が個別に行う従来どおりの形態を取り、SCCを採用することにより、カバーストーリーを提供することでセッション間のつながりや職場における実践の改善を行った（北村ほか2009a・2009b）。

SCCの先行研究はカーネギーメロン大学西校大学院修士課程（2004年・2006年）（鈴木、根本2008）や熊本大学大学院教授システム学専攻（鈴木ほか2007）がある。何れも専用のWebやLMSを用意し、IT技術者の協力を得て教材を提供していたが、本コースは既存のSNS上の電子掲示板を利用し受講者への課題提出を行うようにし

た。ストーリーの中の師長より報告書の課題を課し、全員が報告書やそのフィードバックコメントを参照できる協調学習の形式を取って実施した。

2. 2009年度カリキュラムの問題点

コース全体の満足度アンケート（表1）については、統計的な有意差はみられなかったものの、中央値では2008年度に比べて2009年度で1ポイント高かった。

表1. 満足度評価結果

年	不満足					満足	
2008	0	0	0	10	7		
2009	0	0	0	5	11		

Web環境のあるSNS参加者は9名（53%）であった。環境がない受講者には集合研修時に課題を紙で配布し、報告書をFaxにて送付するよう依頼したが、Faxでの参加者を含め報告書を一度でも書いた受講者が17名中9名（53.0%）、書き込み箇所4回×17名の延べ68箇所中20回の書き込みと低率であった。

一方コース修了時アンケートでは、SCCの必要性の問いに16名から回答があり5件法で平均値が4.3と高い結果となった。この理由は、集合研修の際に毎回SNS画面を紙にコピーし配布したことで、不参加であっても報告書やフィードバックを読むことができ、協調学習の効果が仮想体験できたためと推測する。

課題に対する負担は、未実施者は記述を実際に

行っていないため低い傾向であったが、報告書を書いた群ほど負担感が高い傾向となった。

2009年度の報告書からは、SCCが研修と現実のギャップをどのように埋めて実行するかを吸収する場としての役割を果たしていることが「講師からの情報を元に自院との比較」や「自施設で対応する行動」の記述などから読み取れた。また、セッション間の繋がりに関しても静脈穿刺の手法のみでないことを理解したと感ずる記述として「研修で学んだ内容をすべて活かした『やさしい教育』にしたいと考えている。」等があった。

2009年度の実地試験ではSCCの一定の効果を示す結果となったが、報告書の全員提出に向けた対応改善と、SNS上で受講者間のコミュニケーションがなく受講者対スタッフといった構図になった点の改善を図る必要が残った。

3. 2010年度小集団評価

2010年度の改善点は、SCCの十分な説明のため成人学習セッションにSCCを含め都合2.5時間の説明時間を確保した。また、Web環境の整わない方へFax用紙も提供することとした。

内容面は2009年度の開始直後の報告書提出から改善して、自己紹介からスタートし報告書へのグループ内のコメントを相互に追加した。さらに、所属グループ以外の受講者にもコメントを行う機会を作り、スモールステップで段階的に、課題（ストーリーにおける使命）を増加させた。ストーリーの中で学習者が演じる役をストーリーの中に登場する「てるもちゃん」から学習者本人である「私」に変更することで書き込みの際の違和感を解消する改善も同時におこった。

一方、使用感に関しては報告書を提出する掲示板を分けず「師長の部屋」という使命を提供する掲示板へ提出する改善も行った。以上の内容と使用感の点をSCC部分のみ小集団評価（社内の各セッションを知る看護師等4名）で確認を行った。

2009年度の小集団評価と重複する設問をした結果、内容面はほぼ同等の結果となった。また、使用感（表2）はMann-Whitney検定（有意水準 $p<0.05$ ）を行い互いに自己紹介を行った「てるもの部屋を利用することができたか」の設問で $p=0.037$ と有意差がみられた。

自由意見には、「回を重ねる毎に研修生同士の仲が良くなり、コミュニケーションは活発になった。その中でSCCが中心となって他の研修生が

表 2. 小集団評価結果

	年	分かりやすい /できた		分かり難い /できない	
幸田師長の部屋の使用は分かり易かったか	2009	0	1	3	1
	2010	0	3	0	1
ユニカの部屋の使用は分かり易かったか	2009	0	1	3	1
	2010	0	3	1	0
幸田師長の部屋への報告書提出法は分かり易かったか	2009	0	4	1	0
	2010	0	1	2	1
てるもの部屋を利用することができたか	2009	0	1	0	0
	2010	1	2	1	0

どう感じているのかを知ることが出来、非常に満足した研修となると思う」一方改善意見としては、「画面上に研修テーマの記載があるとそのテーマに沿った内容で報告しやすくなった」とセッション名の挿入希望の意見と、「語尾の”ね”が多い点」の指摘がありこの部分を改善して総括評価（2010年度実施）に入っていく。

4. まとめ

はじめてSCCを導入した2009年度での課題として、第一に参加者増加を目指す。次いで、小集団の結果にあるようにスモールステップによる報告書件数の増加を図る。さらに受講者同士のグループディスカッションによるコミュニケーションを図ることで受講者の経験を通したコメントを増やして協調学習の効果を魅力的に高めて行きたい。

参考文献

- 北村隆始・田中光子・星野早苗・根本淳子・渡邊あや・鈴木克明(2009). ストーリー中心型カリキュラム採用の看護師指導者向けインジェクショントレーナー養成コースの初期検証. 日本教育工学会, 第25回全国大会発表論文集:751-752.
- 北村隆始・田中光子・星野早苗・根本淳子・渡邊あや・鈴木克明(2009). SNSを活用したストーリー中心型カリキュラムの提供, 教育システム情報学会, 第34回全国大会発表論文集:376-377.
- 熊本大学大学院教授システム学専攻(2007) IT時代の教育イノベーション育成. 文部科学省平成19年度大学院教育改革支援プログラム年次報告書, 熊本:23-73
- 大森不二雄(編著)(2008). IT時代の教育プロ養成戦略: 日本初のeラーニング専門家養成ネット大学院の挑戦. 東信堂, 東京:51-62
- SCHANK, R. C. (2002). Every curriculum tells a story fhda.edu, International Journal of Cognition and Technology, elc. fhda.edu
- 鈴木克明(2002). 教材設計マニュアル独学を支援するために. 北大路書房, 京都:95-128.